

經驗内容の種々なる連續（承前）

西田 幾多郎

三

飽和度に於て若干の距離を有する同性質の赤の間に、赤の無限に異なれる系列を入れて考へて見ると、此系列の極限に於て性質其物が獨立の一作用となる、即ち *Ordinaltypus* が *Idealzahl* として特別の取扱を受けるととなる。併し色の經驗は飽和度の立場に於て無限の連續と考へ得るのみならず、色調の方向に於ても又光度の方向に於ても亦無限の連續と考へる事ができる。色の具體的經驗は此等の種々なる *Ordinaltypen* の結合である。我々に直接なる具體的經驗は作用の結合である。併し我々の具體的經驗は單なる色の經驗に限られて居るのではない、無限なる作用の連結である。作用としての性質の無限に豊富なる連結である。而して此の如き作用の無限なる系列は其極限に於て一つの人格となる。自由意志を本質とするが人格とは無限なる作用の統一である。人格は作用の作用、アプリアリのアプリアリである。藝術

の目的とする個性とは此の如き對象界に於ける實在である。縱令、繪畫は色や形の經驗に即し、音樂は音の經驗に即するにせよ、其表現する實在は人格の一片鱗でなければならぬ、此意味に於て物理的實在とは根本的に其次元を異にして居るのである。我々の經驗内容が統一されて行くに當つて、相反する二つの方向を區別することが出来る。一つは個性的統一であり、一つは一般的統一である。色の經驗内容が繪畫に於ての如く個性的に、又自然界の物體に於ての如く個物的に結合すると共に、種なる色の經驗内容は色一般なる概念によつて統一せられるのである。嚴密には三種の統一を區別することが出来る。一つは一般的統一、一つは個物的統一、一つは個性的統一である。一般的統一に基くものは一般的眞理である即ち永久眞理である、例へば數學的眞理とか、對象論的眞理とかいふ如きものである。一般概念が此等の統一の基となり、此等の眞理の基となる。次に個物的統一に基くものは偶然的眞理 *vérités contingentes* 即ち事實的眞理 *vérités de faits* である。個物は自己の中に他の無限の關係を含んで居る。個物に於ての一つの出來事は他と無限の關係によつて成立つて居る。第三の個性的統一の上に立つものは藝術的眞理である。以下右の三種の統一、三種の眞理の關係を考へて見よう。苟くも一般的妥當性を有する眞理

は何の場合に於ても超個人的なる意識一般といふ如きものに基くと見ねばならぬ。超個人的人格はその一部分たる個人的人格と同じく、一方に於て一般的なると共に、一方に於ては個性的である。自由意志を本質とする人格はその何の部分をも自由に反省して之を一般化することができる。と共に、絶對的の唯一性を要求するのである。意識一般は自然科学的世界の基となると共に歴史的知識の基となる。即ち *historische Vernunft* となるのである。自己の經驗内容の何の部分をも自由に反省することのできる人格の否定作用は、人格の本質を成す自由意志であると共に、知識に於ての抽象作用である。自由意志と抽象作用とは共に作用の作用たる人格が自己自身を碎く作用である。所謂表象自體といふのは此の如き作用の對象界であり、我々の經驗の一般化的作用といふのは此の如き方向を指すのである。我々は絶對自由の人格なるが故に、如何に抽象し、如何に統一するかは自由であるのである。數學的知識の基となる統一作用は之と稍其趣を異にして居る。同じく一般的と云つてもそれ自身に内面的統一を有し、夫自身の體系を成して居る。カントの考を藉りて云へば、我々の知識は理解と直覺との結合によつて成立し、理解力の形式即ち範疇と純粹直覺の形式即ち空間時間と結合したものが數學的知識であり、内容ある直覺即ち知覺と結

合したるものが經驗的知識である。カントでは數學的知識は未だ嚴密なる意味に於て知識といふことはできないのであるが、兎も角數學的知識は客觀的對象の條件として、それ自身の客觀性を有すると考へることが出来る。カントでは理解性と直覺性との間に於ける内面的關係統一が十分明になつて居らぬのであるが、カントが數學の基とした純粹直覺の洗練された *homogenes Medium* は論理的判斷の基たる *heterogenes Medium* の具體的根元であると考へることが出来る。フエテ曰く *deine innere Tätigkeit, die auf etwas nusser ihr (auf das Object des Denkens) geht, geht zugleich in sich selbst, und auf sich selbst. Aber durch in sich zurückgehende Tätigkeit entsteht uns, nach obigem, das Ich. Du warst sonach in deinem Denken deiner selbst dir bewusst, und dieses Selbstbewusstsein eben war jenes unmittelbare Bewusstsein deines Denkens. Also das Selbstbewusstsein ist unmittelbar; in ihm ist Subjectives und Objectives unzer trennlich vereinigt und absolut Eins (Versuch) u.°* 此の如く *unmittelbares Bewusstsein* がフエテも云ふ如く眞の *Anschauung* であつて、此處に作用自身の直接の結合がある。SubstantialitätからAktualitätへの推移がある。物體的から精神的への推移がある。是に於て一つの判斷を翻つて見る反省作用が可能となるのである。肯定の裡面に否定を含み一つの肯定作用を翻つて見る *homogenes Medium* の立場は斯く

して成立するのである。知識の客觀性といふのは抽象的立場からその根元たる具體的立場に進むことである、單なる作用の立場から作用と作用との結合の立場に進むことである。此故に數理の世界は論理の世界に對して一種の客觀的實在界となるのである。數理の世界とは單なる抽象作用即ち否定的意志の上に立つ對象界である。單なる抽象的作用即ち否定的意志は又それ自身に於て内面的統一を有する無限なる作用として一種の對象界を有つ、此對象界が數理の如き純なる抽象的眞理の世界、即ち永久眞理の世界となるのである。我々の純なる理性といふのは抽象的自意志とその本質を一にして居ると考へることができ、共にすべての特殊なる經驗内容を否定して一つの中心に結合する可能性を表すのである、共に純なる作用と作用との結合である。フヒテの所謂己自身の中に行く内面的作用即ち自覺が兩者の本質である。作用より直に作用に移り行く理性の内面的必然の感は即ち一面に於て意志自由の感である、理性と自由意志とは一つの作用の兩面とも云ひ得るであらう。すべての經驗の否定的統一は如何なる經驗内容をも離れ得る可能性を意味する點に於て、知識の抽象的作用であり、如何なる經驗内容をも超越して自由に之を綜合し得るといふ點に於て、自由意志である。全體の反省なる意志は一方に於てす

べての範疇を超越する創造的意志である。道德的自由意志が直に理性を内容とする理性的意志と考へられるのは之によるのである。視覚が色を以て其内容とする様に、思惟は純なる認識対象を以て内容として居る。視覚は無限なる色の關係をその対象界とする如く、思惟は永久真理の世界を其対象界として居る。而して純粹視覚が藝術的動作として現れる如く、思惟は意志として現れるのである。

純粹思惟の對象界たる永久真理は右の如きものとして、個物的真理とか個性的真理とは如何なるものであらうか。我々は普通に思惟の内容は一般的であつて、視聽の經驗は特殊的であると考へて居る。併し各自に固有なる感覺的基礎の上に立つ藝術も或一派の人々の考へる如く全然無内容ではない、單に無内容なる藝術は遊戲に墮する外はない。藝術の内容は概念的思想にあらざるは言ふまでもないが、各の藝術は各の藝術に固有なる内容を有つ、その感覺的要素と離すべからざる意味の内容を有つ、他によつて翻譯することのできない意味内容を有つて居る。此の如き各藝術に固有なる *imaginative thought* とは如何なるものであるか。かゝる藝術的内容とは我々の視覚や聽覺の作用が人格的作用として直に其全體と結合する所に現れるのである、即ち人格的統一の一部分となる所に現れるのである。若し斯く云ひ得る

ならば、反省的思惟が全經驗を寫し全經驗を表はし得る如く、視覺も聽覺も全經驗を表象し得ると云ふことができるであらう。此意味に於て前者を一般的といふことができるれば後者も一般的といふことができる。知識的表象は經驗をその儘に寫すといふも、*Vorstellung* „*Sonne*” は輝くのではない、藝術が各自に特有な言語を以て他を表現する如く、思想もその特有なる言語を以て他を表現するのである。今視覺と思惟とを比較して見ると、視覺の對象論的世界は純粹思惟の對象界に當り、此等の對象界はそれ自身に於ては永久不變と考へられるが、此等の眞理が現實となる場合には人格的要素の混入を脱することはできぬ。人格的要素の混入といふことも種々の意味に於て考へられるのであらうが、藝術的要素として色の經驗の中に含まれる人格的内容といふのは、單に主觀的作用の特徴といふ如きものではなくして、對象其物の本質を成して居るのである。此場合色其物は却つて一種の表現手段となるのである。即ち純視覺的經驗内容に就いて對象論的のものと藝術的のものとを分つことができるのである。翻つて思惟體驗に就いて考へて見ると、純なる思惟の内容は色の對象論的内容に當り、藝術的内容に當るものはカントが *Verstandesbegriffe* + *Wahrnehmung* より成るといふ所謂經驗界と考へることができる。所謂經驗界とは人格

的統一の對象界である。視覚作用が單にそれ自身として考へられないで、作用の統一たる人格の一作用として具體的全體の一部分となつた時、それが藝術的作用として藝術的内容をやどす如く、思惟作用が單に抽象的思惟作用としてではなく、人格的一作用として考へられた時、經驗的知識が成立する。Behema, Zeit” は此の如く思惟の孤立的立場を否定して人格的統一に移る具體的立場の第一歩である。此の如き方向を進んで思惟が全人格の統一と結合した時、全人格的經驗の内容を寫すことゝなる。即ち所謂經驗界が成立するのである。經驗界とは思惟の立場に於て全經驗寫したものである。或一つの體系が他を寫し他を表象するには、二つの體系が一つの體系に於て内面的に結合せられねばならぬ。無限のモナドは神の *decretis libere* に統一せられて、互に相表象することができるのである。作用の作用たる人格的統一の上に立つ精神活動にして、はじめて部分の中に全體を藏し、其一が他を表象することができるのである。我々の表象とか概念とかいふのは純粹思惟の立場に立つて全經驗内容を寫す手段である。すべて或一つの作用の立場から他を表象するには、それ自身に特有な言語がなければならぬ。ロダンは物體が平面の集合より成立することを、見出したと云ふのは藝術家自身の純なる言語を見出したのである。藝術

家は學者が概念の世界を有つ如く色や形の世界を有つ、藝術家のテクニクは學者の論理に相當するのである。それで藝術的對象の中に個性を含み人格的要素を含むと云ふも、直接に藝術の對象となり内容となるものは純なる藝術の語によつて寫されたる客觀的世界である。例へば印象派の人々が表さうとした如き *Lichtmasse* の世界である、ゴッホの表した如き *dynamische Farbe* の世界である。斯く藝術が概念の束縛を離れてそれ自身の立場に立つ時、即ち人格的統一の上に立つ時、その對象界は人格的基礎を有し個性を表すことゝなるのである。學問的眞理は純客觀的にして何等の人格的要素を含まない様であるが、客觀的眞理が深ければ深い程、學者の個性を表すと同様である。此方面に於て總ての藝術が一に向ふのみならず、學問と藝術とも結合することもできるのである。Walker Pater が *All art constantly aspires towards the condition of music* といふにも眞理がないとは云はれない。此意味に於て學問の中に就て音樂の地位に當るものを求めるならば哲學であらうと思ふ。嘗て *レッシング* が論じた如く各藝術はそれぞれ領域を有し、*pictorial charm* と *musical charm* とは互に相異なるにもせよ、繪畫に音樂的なものもあり、詩や文章に繪畫的なものもある。藝術は各自に特有なる感覺的要素の異なるに従つて、他によつて表すことのできない特

色を有すると共に、一方に於て綜合的統一の意義を有すると考へることが出来る。種々の學問もそれぞれの立場に於て各自獨立の眞理を有し、各その分化的方向に進むと共に、一方に於て綜合的統一に進むことができる。而して個々の學問の據つて立つ所のアプリオリを反省し之を綜合統一するものは哲學である。此點に於て藝術と哲學との接觸がある。藝術も學問も各その特有なる言語によつて客觀界を表象すると共に、一方に於て人格的内容を含み個性を表現して居る。繪畫は色や形によつて、音樂は音によつて、學問は概念によつて客觀界を表象すると共に人格的内容を含むのである。

右に述べた如く我々は藝術の内容に就ても、知識の内容に就ても並行的に同様のことが云ひ得るのである。色の對象論的關係は論理、數理の知識に當り、色や形の結合から成る藝術の對象界は我々の所謂經驗界に當る。光や色の言語によつて寫された經驗界が藝術の對象界であり、概念の言語によつて寫された經驗界が所謂經驗界である。藝術の世界は光や色の無限なる結合の世界であり、經驗界とは概念の無限なる結合の世界である。是に於て色や光は單なる意味ではなくして視覺作用となり、概念も單なる意味ではなくして認識作用となる、即ち共に人格の一作用となる

ことによつて、一つの客觀界を得るのである。藝術界は單に主觀的と考へられ、經驗界は客觀的と考へられるが、藝術家も彼等の間に互に論議すべき一つの客觀界を有するのである。我々は思惟の範疇によつて經驗を統一する如く、畫家は視覺の範疇によつて此の世界を色や光の統一として見るのである。經驗界の知識といふも色に考へられるであらうが、その基たるものは事實の眞理である。自然法とは此等の事實を基礎として一般化したものである。事實の知識とは如何なるものであるか。或一つの出來事を唯一の事實として知るといふには、之を時間空間の上に限定せられたものとして見なければならぬ。而して斯く限定せらるゝといふことは此物が他と無限の關係に於て立つことを意味して居なければならぬ。或一點が他と無限の關係に於て立つといふには二様の考をなすことができる。一つは或一點が全體系の一點として他から無限の關係に於て定められるといふことであり、一つはライブニッツの單子に於ての如く自己自身の中に於て無限に他を表象する事である。前の意義に於ては單に個事となり、後の意義に於ては個體となる。前の意義に於ては統一の主體が唯一の個體となり、他はその様態となる。此の如き統一が徹底的となる時、異質性を否定して同質的となり、此傾向を進んだものが物理的世界である。

後の意義に於ては、之に反し部分の一々が個體となると共に、其中に他との無限の關係を含んで居なければならぬ、即ち他の總てを表象するものでなければならぬ。而して此の如き關係を有するのは精神的なるものにして始めて可能であるのである。

自然科学的統一に於ては異質性が同質性に還元せられ、量的に統一せられるのであるが、意識的統一に於ては異質的なものがそれ自身の存在性を有し、質的に統一せられるのである。質的に統一せられるとは内面的發展の統一として統一せられるといふことであり、而してライブニッツのモナドジイに於ての如く無限なるモナドは神の意志の決定によつて豫定調和の下に立つものとして、はじめてその一が無限に他を表象することができるのである。我々の或意識現象が個性を有するといふことは、己が人格を表現することによつて、他を表象することができ、従つて他と無限の關係に於て己が個性を維持するのである。Occasionalistenの考の如く我々は神を通じてのみ心と物とを結合することができる。嚴密に考へれば反省其物を自己の中に含む眞に具體的なる我々の精神は單なるモナドではない、モナドは尙考へられた精神であつて、考へる精神ではない。我々の自己の底に自己其ものをも否定し得る絶對意志がある。我々は之れによつて他の精神と結合し、物體界と結合する、とが

できるのである。マルブランヌの *Dieu est très étroitement uni à nos âmes par sa présence, de sorte qu'on peut dire qu'il est le lieu des esprits, de même que les espaces sont en un sens le lieu des corps* といふ語に深い意味があると思ふ。即ち部分の中に全體を含む個物的限定に於ても二様に考へることができ、一つは *le present est gros de l'avenir et chargé du passé* といふ様に縦の限定即ち時間上の限定であり、一つは *l'harmonie préétablie* といふやうに神の意志に於ての限定である。即ち横の限定、空間的限定である。單なる縦の限定によるものは我々の個人的意識の如きものであつて、所謂唯心論は此の上に成立するのであるが、我々が神の意志の上に立つとき、我々は物と心との統一の上、即ち主客合一の上に立つのである。我の現在の意識は無限に他を表象することによつて、心は即ち物、物は即ち心となるのである。單なる物體界といふのは神の絶対否定の一面に過ぎない、神は絶対の否定と共に絶対の肯定である。元來神の本質は絶対の愛である、愛はすべての人の人格を統一すると共にすべての人格を立するのである。他の人格を敬すれば敬するほど眞に自他合一の愛が成立するのである、愛は *coincidentia oppositorum* である。一般的なるものと特殊的なるものとの眞の結合は愛に於てのみ可能である。眞の豫定調和は神の絶対の愛の上に立たねばならぬ。我々は藝

術的意識に於て此統一に接觸するのである。

右の如き考を基として更に科學的内容と藝術的内容を比較して見よう。すべての經驗内容を否定的に統一する絶對意志の作用が思惟である。他の内容を排する否定的統一は却つて他より排せられる一作用として、他の作用と同じくそれ自身に特殊なる對象界を有つ、論理數理の世界がそれである。此點に於て思惟は視覺や聽覺と同じく、人格の一作用に過ぎない、唯、思惟の内容が他に比して一般的であると考へられるのであるが、我々は色の經驗、音の經驗の中に於ても特殊と一般とを區別することが出来る。色には種々の性質があり種々の色合があるのみならず、具體的感覺は光度を有し飽和度を有して居る。色の一般概念とは此等の作用の統一作用の性質である、恰も全人格の統一作用の内容として思惟の内容が考へられると同様である。一般的といふのは統一作用の性質である。思惟作用が否定的統一から肯定的統一に移る時、即ち我々が人格の具體的統一の立場に立つ時、その内容として所謂經驗界が成立するのである。而して此の如き經驗界は相反せる兩方向に分れその間に種々の階級を有するのである。その否定的統一の方向に當るものが所謂自然科學的知識となり、その肯定的方向に進むに従ひ、心理的となり、歴史的となる。經

驗科學的知識はその一般的統一の方向に於ては自然科學となり、その個體的統一の方向に於ては歴史となる、藝術的内容といふのは此等の經驗科學的内容と異なり、視覚とか聽覺とかいふ如き部分的なる作用が絶對意志の否定的統一即ち思惟作用の支配を脱して、全人格の統一を表現しようとする所に現るのである。視覚とか聽覺とかいふものは人格の一作用として思惟と同じくそれ自身の抽象的内容即ち色や音の對象論的世界を有つのであるが、思惟の立場から全人格の内容を表現して經驗界を生ずる如く、視覚や聽覺の立場から全人格を表現する時、藝術の世界が生れるのである。藝術の世界は科學の世界と同じく人格的統一の上に立つ具體的世界である。畫家が或形を見、音樂家が或音を聞くのは、科學者が或物を考へる如く、具體的實在として之を見、之を聴くのである。唯その内容が有限で部分的であるだけ、思惟の場合に於ての如く一般的に自由なることはできないのであるが、之が爲に藝術の内容は無限なる人格の世界を表現することができないとは考へられない。或一つの藝術の世界はその具體性に於ては知識全體の世界と同じである、即ち我々の所謂經驗界の全體とその性質を同じくするのである。普通に知識は一般的であり藝術は特殊であるといふが、所謂一般的知識といふのは知識の一面であつてその全體で

はない。知識の一面は歴史に於て見る如く個性的である。我々の經驗界即ち知識の世界は自然科学プラス歴史でなければならぬ。認識の對象たる具體的實在は一般的なると共に特殊である。而して此兩方面を統一する綜合的知識の立場が哲學の立場であるから、前に云つた如く哲學的知識内容は藝術的内容に相當し、哲學者の世界觀は直に藝術の内容と結合するのである。デルトアイの云ふ如く哲學、藝術、宗教は同一の根より生ずるのであると考へることが出来る。各の藝術は各自の感覺的要素に特有なる内容を有つて居るのではあるが、ペーターの考の様に藝術は一に傾くといふにも眞理がなければならぬ。此の如き共同の内容は言ふまでもなく認識對象ではなくして感情的内容である、此の如き感情的内容に於て藝術は哲學と抱合するのである。若し作用と作用との無限なる結合作用即ち *Phantasie* の對象界が純なる感情の世界であるとすれば、藝術と哲學とは想像の對象界に於て結合するといふことができる、即ち想像作用が兩者の根柢を成すと考へることが出来る。唯藝術はその内容の狭小なるだけ直觀的統一に傾き、哲學はその内容が包括的であるだけ之に反すると考へられるのである。人格の中心たる思惟の立場に於て徹底的統一に到らんとする時、我々は道德的意志の立場に立たねばならぬ、此立場に於て眞に

内外の統一を見る事ができるのである。恰も純粹知覺の表出運動が藝術的動作として現れる如く、哲學的思索の表出作用は道德的行爲として現れるのである。此意味に於て道德的行爲は哲學的思想の象徴である。我々は道德的行爲に於て *Extensio* と *cognitio* との兩屬性を統一して、絶對無限なる神に接することができるのである。道德的意識内容は一般的なると共に特殊でなければならぬ。道德的行爲は一般と特殊との結合點である。單なる哲學者は手なき藝術家の如きものである。我々が道德的意志の上に立つ時、豫定調和をも超越して内外合一の具體的世界を意識するものである。併し眞に内外融合して一々の部分が直に全體を含む絶對意志の立場は宗教の立場であると云はねばならぬ。宗教の立場に於て眞に當爲と存在とが合一し、一々の實在は純眞なる藝術品となる。宗教の立場は人格の中心に於て即ち絶對意志に於ての藝術的立場である。哲學的思索と道德的行爲とは宗教に於て眞に内的結合を得るのである。

四

我々に最も直接なる具體的經驗即ち眞實在は人格的であつて、無限なる作用の内

面的結合である、無限なる作用自身の結合である。此の如き無限なる作用自身の統一の立場を余は絶対意志の立場といふのである。概念的思惟の立場から考へれば達すべからざる無限點の如きものでもあらう。神秘哲學者の考へた如く神はすべての範疇を超越して居ると考へねばならぬ。併し思惟の立場からは斯く考へねばならぬとしても直下には轉々自在にして純眞なる此實在に外ならない、之より單純にして明白なるものはない。此の如き絶対意志の否定的統一が理性であつて、此作用は一方に於て實在の認識作用となると共に、一方に於て實在を創造する道德的意志となる。道德的世界は自然界の中にあるのではなくして、自然界は道德界の上に立つのである。知識は意志の後に隨うてその跡を整理するに過ぎない。右の如き理性は我々の人格の中心として全人格の統一作用たると共に、一方に於て單なる一人格的作用としてそれ自身の抽象的對象界即ち純なる論理數理の世界を有つのであるが、部分の目的は全體にあるのであるから、理性がそれ自身の具體的根元に向ふ時、*Verstand + Wahrnehmung*なるカントの所謂經驗界が現れて來るのである。論理、數理、幾何と進み來つて、所謂經驗内容と結合するに當つて、その中間としては力學的對象界といふ如きものも成立するであらう。力學的對象界は、理性が單なる抽象的立場か

ら人格の一作用として具體的となる時、即ち動的となる時、現れ來るのである。理性が動的意志となることによつて、力の對象界を見ることができるのである。カントの *ästhetische Grundsätze* の對象界は斯くして成立するのである。理性自身が作用の形相を取ることによつて、他の無限なる作用を統一する形式となることができるのである。幾何學的には線とか形とかいつたものは、力學的にはすべて力の量となり方向となるのである。範疇に *Schema* *Welt* が加はる時、すべてが動的となり、力學的世
界が成立するのである。右の如く理性それ自身が動的となり、即ち意志となり、力學的
的形式によつて全經驗を統一する時、我々の所謂經驗界が成立し、物體界とは此方向
を進んだものである。然るに精神界とは思惟の立場から逆に此人格的體驗の原狀
態に還つて見たものである、即ち作用と作用との直接の結合たる *Actualität* の形式に
よつて成立する實在界である。實驗心理學の對象界の如きものから歴史の對象界
に至るまで、此等の現象はもはや自然科学的因果律によつて統一することはできな
い、内面的統一の因果律によつて結合されねばならぬ。併し全然以上述べた如き
思惟の立場、即ち認識作用の立場を棄て、深く全人格の内面的統一の立場に入る時、
我々は認識對象界を超越して道德的行動の世界に入る。我々はもはや一つの立場

から他を寫すのではなくして人格作用其物となるのである。是に於ては對象と作用とが一となる。我々は道德的行爲に於て物たると共に心である、内外を打して一實在となるのである。作用と作用との結合の窮極する所もはや何等の外面的統一をも許さない、唯行爲あるのみである、肯定も否定もない、絶對意志の具體的作用あるのみである。此立場に住して打成一片、隨處に主となる時、我々は宗教の立場に立つ、宗教的直觀に於ては萬里一條の鐵、内外の區別もなければ自他の區別もない。

以上余が人格的體驗の中心とも見らるべき思惟作用の立場に就いて云つたことは、人格的體驗の部分的作用に就いて云ふこともできる。視覺も聽覺も人格的作用として、具體的にはそれ自身の對象界を有つ獨立自由の作用である。抽象的には色自體又は音自體の對象論的世界を有つのであるが、此等の作用が全人格の内面的活動の中に入つて其内容を影射する時、我々は藝術の對象を有つ、藝術の立場は部分的體驗に於ける宗教的立場である。シヨールペンハウエルの云つた如く藝術家は神來の瞬間に於ては宗教家である。而して此論文の始に於て述べた如くすべて一つの立場から、その背後に横たはる具體的立場に到るには、立場の超越がなければならぬ、即ち極限概念によつて之と結合するのである。色の表象自體はその無限なる系列の

極限に於て作用となる。我々の視覚作用といふのは色調や光度や飽和度の無限なる系列の統一である。我々の人格とは此の如き作用の無限なる連續の統一である。表象自體がその無限なる總和の極限に於て獨立の精神作用となる如く、作用の無限なる總和はその極限に於て自由なる人格となるのである。而して各の作用はそれ自身に固有なる對象界を有ち、我々の經驗的世界といふのは作用の作用たる意志即ち人格的統一の對象界であるが、道德的意志の立場から見ればこの世界は自由意志の Typus として無限なる世界の一に過ぎない。自由意志の對象たる道德的世界は無限なる自然界の總和の極限である。而してヘーゲルの「概念」に於ての如くその何の部分に於ても全體の相を具する人格的體驗に於ては、繪畫や音樂に於て見るが如く、視覚とか聽覺とかいふ如き部分的體驗も直に主客合一の具體的體驗の相を現ずることができ、此等の體驗に於ても種々なる立場、種々なる世界を具して居ると考へることができ、併し藝術は單に部分的なる具體的立場に過ぎないから、種々の立場、種々の世界の具體的統一に於ける眞の關係は唯哲學、道德、宗教の全人格的立場に於てのみ之を明にすることができ、我々の文化發展は之を中心として抽象的より具體的に進むのである。新らしい文化は古き文化發展の極限として現れ來る

のである。我々の眞の永久の生命は Ethious や Answer の生活の上に求むべきではなくして、若くして十字架上に釘付けられた基督の上に求むべきであらう。(完結)

此論文の後半は多少論述の混雑を來したかも知れない、併し私は此混雑を我母に別れた我心の記念としたいと思ふ。